

選評

檜山 智美

キジル石窟第一一八窟（海馬窟）の壁画主題 —マーンダートリ王説話を手掛かりに—

檜山智美氏の論文は、いまだ定説をみないキジル石窟第一一八窟（通称海馬窟）の壁画主題に関し、マーンダートリ王説話に基づくとする新たな解釈を提示したものである。

古代シルクロードの要衝として栄えた亀茲国最大の仏教寺院址であるキジル石窟は、二十世紀初頭のドイツ探検隊による壁画の切り取りなどで破壊が進み、第一一八窟も現地では正壁とヴォールト天井に僅かに壁画が残るのみである。近年、放射性炭素年代測定法により、三～四世紀にかけての石窟最初期の制作と目されるようになった同壁画の主題については、グリェンヴェーデルを始めとして、欧米や日中の研究者により様々な解釈が試みられてきた。檜山氏は、これまでの仏伝に関連付ける見方や、壁画の部分的解釈にとどまりがちな従来説を批判的に消化し、写真や模写等を援用しながら、左右側壁を含む窟全体の壁画に対して復元的考察を試み、全ての壁画を矛盾なく説明し得るのは、マーンダートリ王説話のみであると結論づけた。

古代インドの転輪聖王説話の一つであるマーンダートリ王説話は、主に南および西インドの遺品に、三十三天で帝釈天と共に坐す姿や、地上で死を迎えて横たわる姿などとして表されている。檜山氏は、それらと第一一八窟の正壁ならびに左右側壁画との図像の類似を読み取り、さらにヴォールト天井部などに見られる説話のプロット以外の表現についても、阿含を重視する説一切有部系の亀茲初期仏教の様相が反映したものと論じるなど、当地の仏教史と関連付けながら、壁画全体に考察をめぐらせた。

その論証は、壁画に対する緻密な図像分析を踏まえながら、漢訳經典のみならず、サンスクリット語やパーリ語の原經典に当たるなど、仏教図像学のあるべき研究法を示したものと見える。また欧米・中国・日本にわたる幅広い先行研究にも丹念に目配りしながら自説を展開しており、とくに「マーンダートリ」の名の由来を物語る裸体の女性像の存在に注目した点など、主張の裏付けとなる独自の論拠も散見される。よって檜山氏の研究は、キジル石窟第一一八窟の壁画主題に関して、説得力のある新解釈として大いに評価しえるとともに、西域美術における部派仏教の影響の一端を明らかにしたものとして注目に値する。

以上により、檜山智美氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称える。